

ついに発見！オガサワラヒメミズナギドリの営巣地 —謎の希少鳥類は、小笠原の国有林に生き残っていた—

ポイント

- ・世界的な希少種オガサワラヒメミズナギドリの営巣地が初めて見つかりました。
- ・世界自然遺産小笠原諸島の国有林で10羽を発見しました。
- ・外来のネズミや植物を駆除したことにより、営巣地が保全されたと考えられます。

概要

独立行政法人森林総合研究所は、NPO法人小笠原自然文化研究所との共同研究により、世界的に貴重な海鳥であるオガサワラヒメミズナギドリが小笠原の国有林に生き残っていることを確認するとともに、その営巣地を世界で初めて発見しました。この鳥は、過去に8回しか確実な記録がない非常に希少な種で、環境省や世界自然保護連合により絶滅危惧IA類に指定されています。

巣は、世界自然遺産の島である小笠原諸島の東島において、2015年2月25日に発見されました。この島では少なくとも10個体が見つかり、種の確認のため4個体を捕獲しました。捕獲個体は、形態測定および足環装着後に速やかに放鳥しました。巣と個体は、タコノキの低木林とオガサワラススキの草地が混在する環境で見つかりました。これは、東島海岸部の典型的な環境です。

東島の国有林は、林野庁により森林生態系保護地域として保全されており、固有森林生態系の修復を目的とした外来植物の駆除事業が営巣地に配慮しつつ行われています。また、捕食者として大きな脅威となる外来ネズミも環境省により根絶されています。このような保全事業の成果により、オガサワラヒメミズナギドリが生き残ることができたと考えています。他の島でも同様の保全事業を進めていくことで、本種の生息地を保全できると考えられます。

予算：環境省環境研究総合推進費「小笠原諸島の自然再生における絶滅危惧種の域内域外統合的保全手法の開発」（4-1402）

問い合わせ先など

研究推進責任者：森林総合研究所 研究コーディネータ 小泉 透
研究担当者：森林総合研究所 野生動物研究領域
鳥獣生態研究室 主任研究員 川上和人
広報担当者：森林総合研究所 企画部 研究情報科長 森澤 猛
Tel：029-829-8134 Fax：029-873-0844

本資料は環境省記者クラブ、林政記者クラブ、農林記者会、農政クラブ、筑波研究学園都市記者会に配付しています。

背景

オガサワラヒメミズナギドリは、ミッドウェイ諸島で見つかった古い標本に基づいて2011年に新種として発表されました。この時点では、ミッドウェイで2回の記録があるだけで、すでに絶滅してしまっている可能性もあると考えられていました。一方、世界自然遺産の島である小笠原諸島では、過去20年の間に正体不明のミズナギドリ6個体が見つかっていました。そのDNAを分析した結果、この鳥がミッドウェイの種と同種であることがわかりました。小笠原での最も新しい記録が2011年のものだったことから、本種は小笠原に生き残っている可能性が高いと考えられました。この件は、2012年2月に独立行政法人森林総合研究所（以下、森林総研）からプレスリリースされ、大きな注目を集めました。

これまでに確実にこの種だと判明している記録はこれらのわずか8例しかなく、非常に個体数が少ないと考えられることから、環境省や世界自然保護連合のレッドリストでは、絶滅危惧IA類に指定されました。しかし、その分布も生態も個体数も全く分かっておらず、謎に包まれていました。

参考：「絶滅したと思われていたミズナギドリの希少種を小笠原諸島で再発見 -世界自然遺産に生き残っていた希少鳥類-」（2012年2月7日、プレスリリース）

www.ffpri.affrc.go.jp/press/2012/20120207/documents/20120207.pdf

経緯

オガサワラヒメミズナギドリがこれまで発見されていなかった理由は、二つあります。一つ目は、その個体数が非常に少ないことです。世界各地の島で、海鳥の繁殖地は外来生物の脅威にさらされており、本種も同様の状況にあると考えられます。このため、この鳥を絶滅の危機から救うためには、まずその繁殖地を見つけて積極的に保全を行う必要があります。二つ目は、この鳥の繁殖期が冬だと推定されるためです。冬は海況が悪いため、海鳥の繁殖地となる無人島での調査はほとんど実施されていませんでした。

小笠原諸島で過去に見つかったうちの3個体は、2006年に東島という無人島で発見されました。この島は、他にも4種の海鳥が営巣する有数の海鳥繁殖地です。そこで、森林総合研究所では、小笠原総合事務所より国有林の入林許可を得て、小笠原の地元NPOである小笠原自然文化研究所と協力して、冬の東島において本種の繁殖地を探索しました。

内容・意義

ミズナギドリの仲間は、繁殖地で夜間に独特の鳴き声をあげます。そこで2015年2月25日に、鳴き声を頼りにオガサワラヒメミズナギドリを探索しました。その結果、この島で少なくとも10個体の鳴き声を確認しました。種を確認するため、そのうちの4個体を捕獲し、形態測定および足環装着後に速やかに放鳥しました。捕獲個体は、タコノキの低木林とオガサワラススキの草地で見つかりました。また、タコノキの低木林に隣接したオガサワラススキの草地の地面に掘った穴の中で、抱卵中の巣が1箇所発見されました。今回の発見は、小笠原に確かにこの鳥が生き残っていることを証明するとともに、世界で初めての営巣確認となりました。

過去にミッドウェイで見つかった個体は、通常の生息地から離れた迷鳥と考えられています。また、小笠原で見つかった個体は、いずれも死亡個体または集落での保護個体でした。このため今回の個体は、世界で初めて自然な状態で見つかった個体と言えます。この

発見により、オガサワラヒメミズナギドリの繁殖地が、在来の固有種であるタコノキやオガサワラススキを中心とした環境であることが明らかになりました。また、本種が冬季に繁殖することも証明されました。これらは、この鳥の繁殖生態に関する初めての知見です。

東島は、林野庁により森林生態系保護地域として保全されており、上陸・入林を厳しく制限するとともに、固有森林生態系の修復を目的とした外来植物の駆除事業が営巣地に配慮しつつ行われています。また環境省により、2008年～2010年に外来ネズミの駆除が行われています。これらの保全事業の成果により、オガサワラヒメミズナギドリがこの島に生き残っていたものと考えています。

この発見は、世界自然遺産地域である小笠原諸島の自然の持つ価値を、さらに高めるものと言えます。

今後の予定・期待

絶滅をも心配されていたオガサワラヒメミズナギドリは、小笠原に生き残っていました。このように希少な生物が生き残ることができたことは、小笠原で行われてきた生態系保全事業の成果と言えます。

島で繁殖する海鳥にとっては、外来生物が大きな脅威となります。2006年にこの島で見つかった3個体のオガサワラヒメミズナギドリは、いずれも外来種のクマネズミに捕食された死体でした。ネズミは、世界各地の島で海鳥の脅威となっています。また、多くの島で外来樹木であるトクサバモクマオウやギンネムの分布拡大が問題となっています。これらの樹木は在来植物を駆逐し、この鳥の営巣環境を奪います。東島では、トクサバモクマオウはすでにそのほとんどが駆除されており、ギンネム駆除も来年度から進められる予定です。共同研究機関の小笠原自然文化研究所は小笠原総合事務所と協定を結び、東島の海鳥繁殖地の保全を官民一体となって推進しています。小笠原諸島の他の島でもこれらの外来生物を駆除することで、まだ生き残っているかもしれないこの鳥を、絶滅の窮地から救うことができると考えられます。また、潜在的に繁殖可能な場所を増やし、本種の個体数の回復に貢献できます。

ミズナギドリの仲間は、光に誘引される性質があります。小笠原で1997年と2005年に見つかった個体は、集落の光に誘引されて不時着した保護個体でした。このような個体は、交通事故やネコの捕食にあう可能性が高くなります。小笠原では、光が拡散しない構造の街灯の設置も始まっており、地元社会と協働してこれを推進することで、集落地域での保全も進めることができます。

しかしながら、今回見つかった個体数はごくわずかで、いまだ絶滅の危機にあります。生息地での保全策を引き続き進めるとともに、立ち入りを厳しく制限し、直接の影響だけでなく外来種の非意図的な侵入を防ぐ必要があります。今後は、見つかった営巣地をモニタリングしていくとともに、より広い範囲でオガサワラヒメミズナギドリの営巣地を探索していく予定です。

本種の置かれた状況を考えると、絶滅する前に生息を確認できたのは、とても幸運なことです。今後、この鳥が絶滅することのないよう、より詳細な生態や分布を解明し、保全事業の推進に貢献していきます。

用語の解説

・オガサワラヒメミズナギドリ

英名 Bryan's Shearwater、学名 *Puffinus bryani*。体長27cm～30cm、翼開長55～60cm、体重130～150g。上面が黒色、下面が白色の小型ミズナギドリ。足が青く、下尾筒が黒く、顔の下面の白色部が目の上まで広がっているのが特徴。

・絶滅危惧IA類

絶滅のおそれがある野生生物を指定したレッドリストの中で、もっとも絶滅の危険性が高いとされるランク。

・ミッドウェイ諸島

ハワイ諸島の北西部に位置する島々で、第二次世界大戦時には島全体が軍事基地として利用された。戦後は国立自然保護区とされ、コアホウドリやクロアシアホウドリなどの海鳥が多数繁殖している。小笠原諸島から約 4000 km離れているが、繁殖している海鳥には 共通の種が多い。

共同研究機関

NPO 法人小笠原自然文化研究所



図1. 今回の調査で見つかったオガサワラヒメミズナギドリ。



図2. オガサワラヒメミズナギドリの巣。
オガサワラススキ群落内の地中に掘られた穴の中で営巣していた。



図3. オガサワラヒメミズナギドリが見つかった環境。低木林と草地が混在している。



図4. 捕獲調査風景。捕獲個体は、計測および足環装着後に放鳥した。